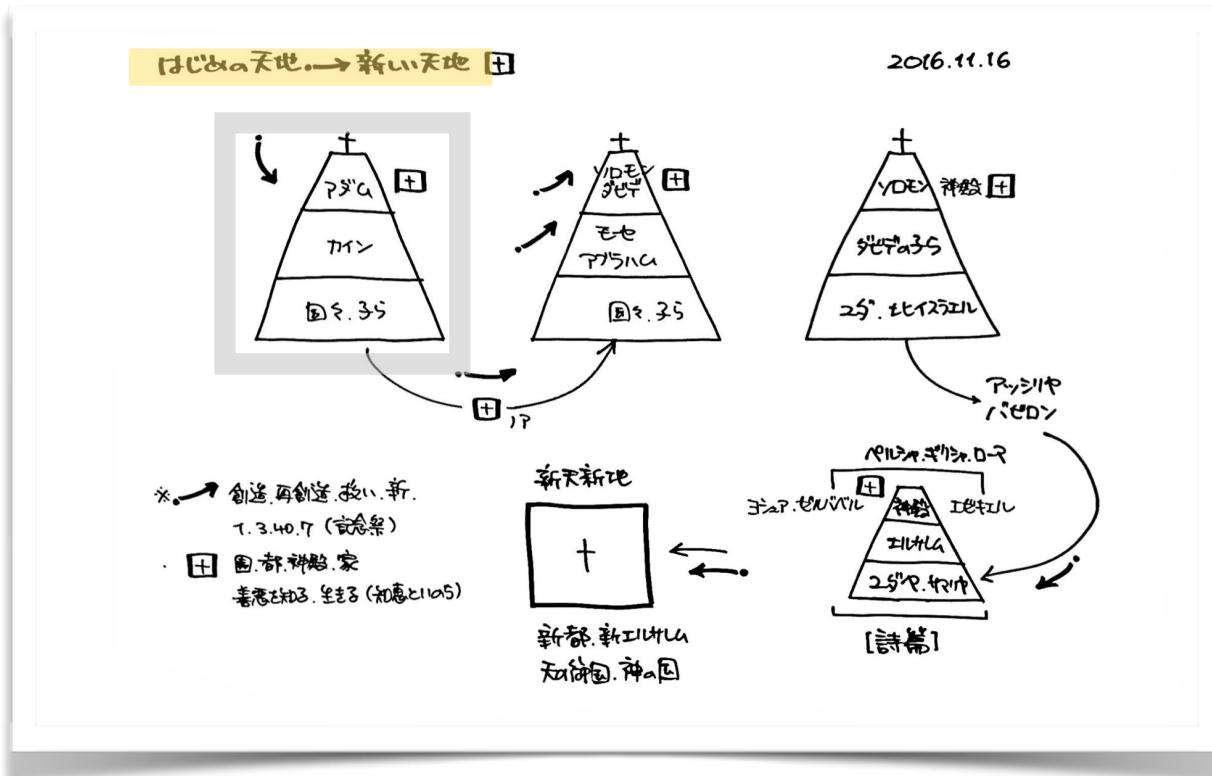




はじめの天地創造から新しい天地創造へ 神の聖所の物語



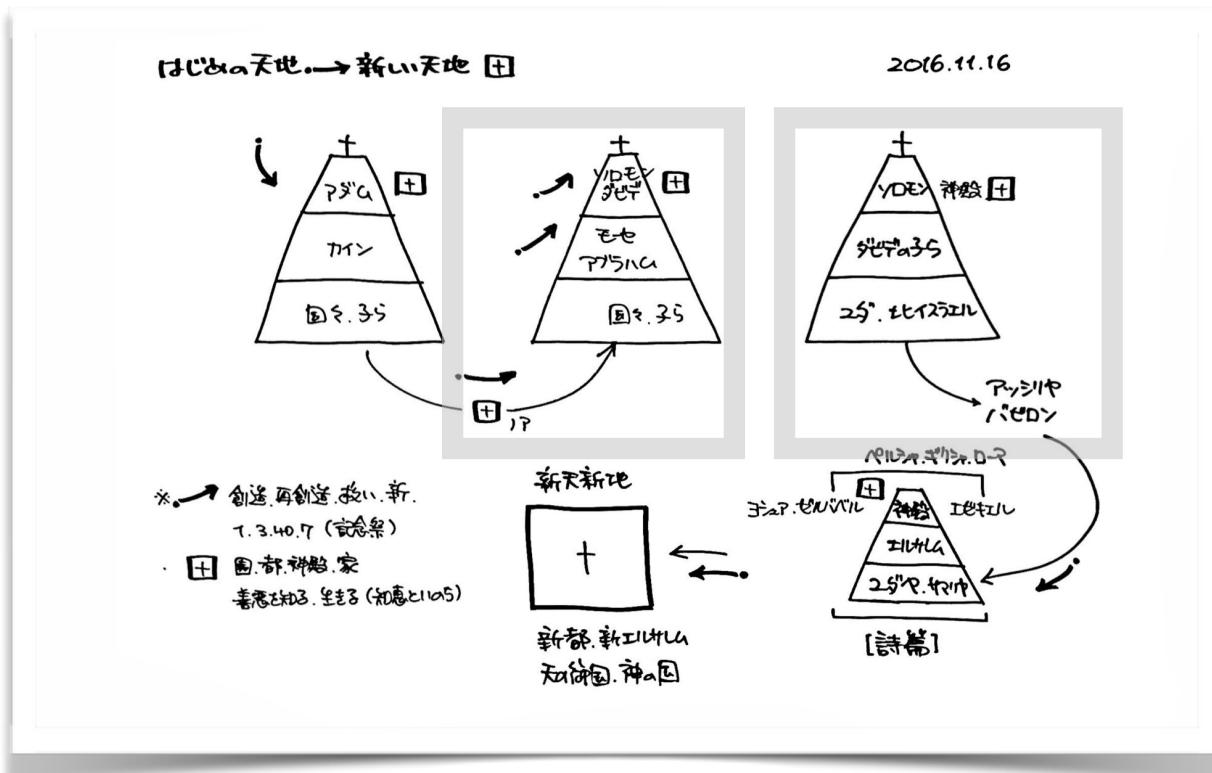
初めの創造から新しい創造、初めの天地の創造から新しい天地の創造へ。

これは、聖書の概略にもなっていますし、歴史の概略にもなっています。

3段階です。アダムがいてカインがいて、国々がある。全世界、地球があってその中に国があって、その真ん中に園がある。全世界があって、その中にイスラエルの国があって、神殿があるという形で3段階になっています。

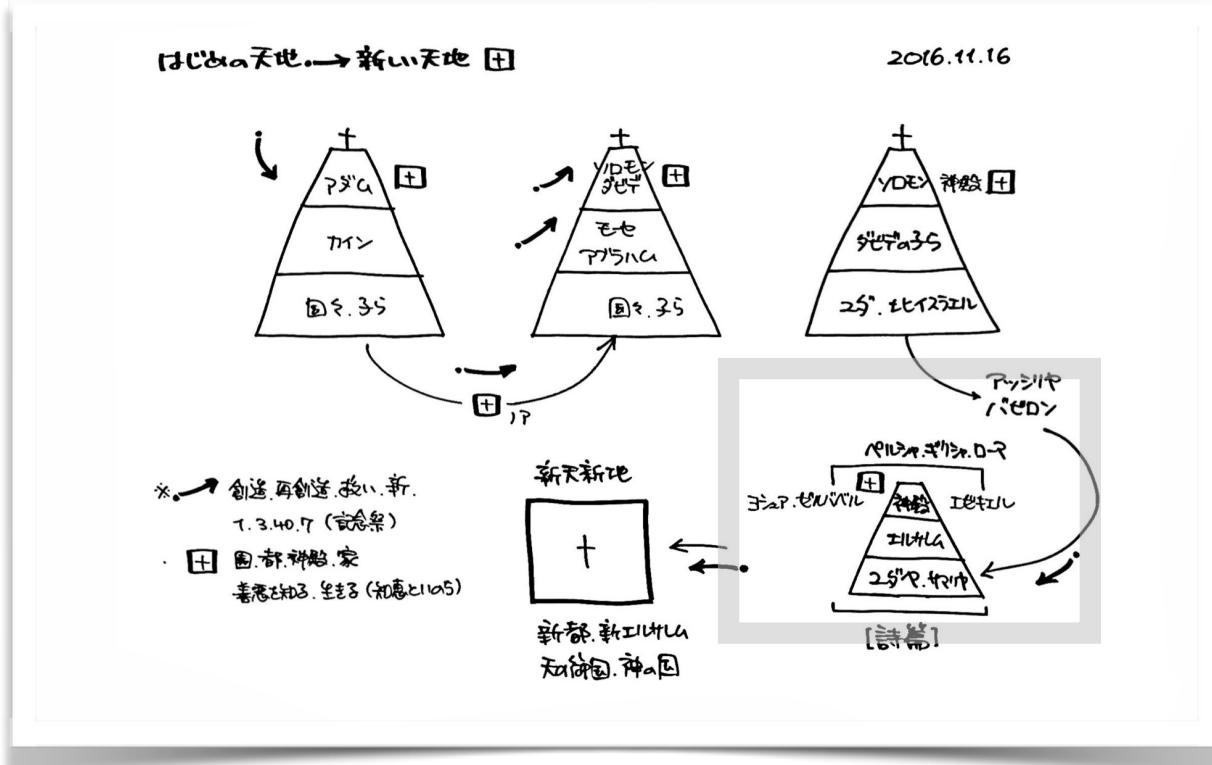
幕屋の形を見るとわかるように、庭があって、幕屋があって至聖所がある。ノアの箱舟も3階建てです。神様に近い順になっています。そしてそれが広がっていくという3階層になっていると思います。

園から追い出されたアダム、国から追い出されたカイン、地から追い出されたセツの子孫たちが洪水で地球から追い出されて、ノアが3階建ての箱に入って、救われて70部族、70の国々ができます。



アブラハムを通してイスラエルの地という約束の地が戻ります。そして、約束の地が戻りましたので、約束の地の中に神様の家である神殿が造られます。

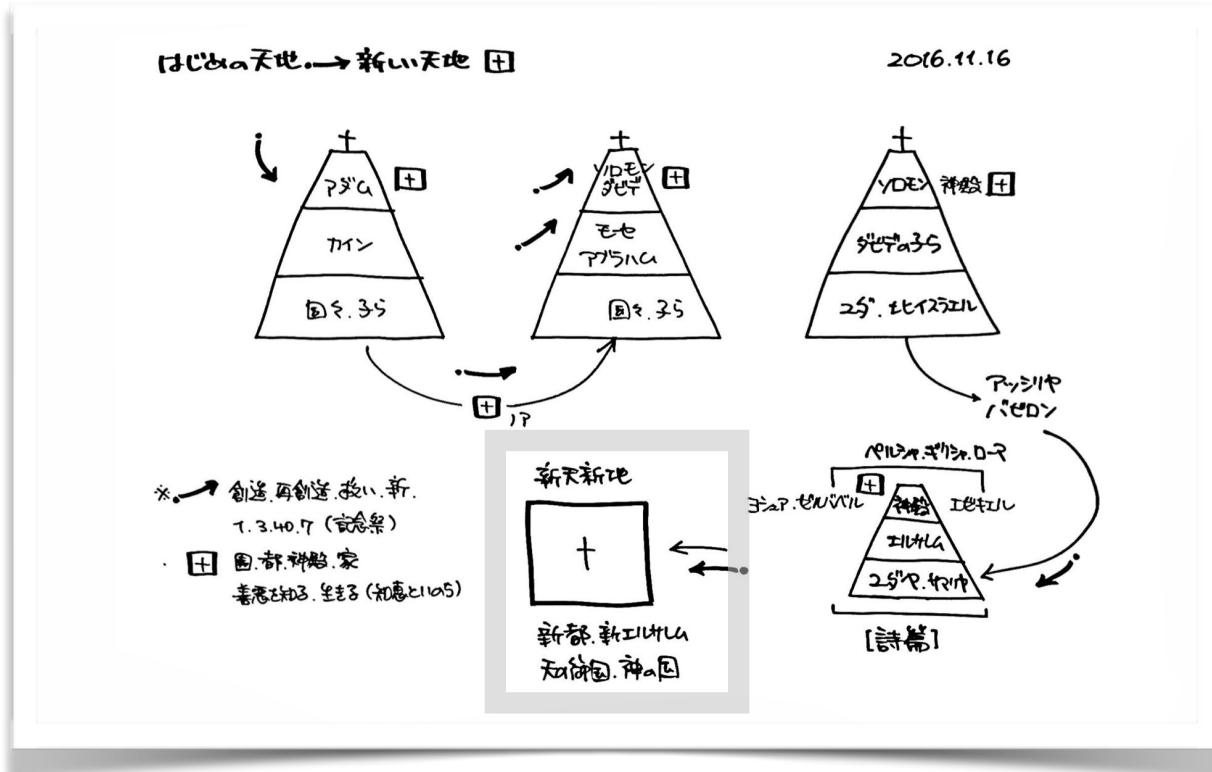
残念ながら、最初のソロモンの神殿は、偶像礼拝によって汚されてダビデの子ら、ソロモンとその兄弟たちは分裂して戦います。そして、ユダと北イスラエルに分かれてしまつて、最終的にその人たちが約束の地から追い出されて、アッシリア、バビロンに吸収されてしまいます。また、そこから連れ出されて、（ノアの時の出ていたのが戻るのに似ています）バビロン、アッシリアから戻されてユダヤに戻ってくる。エルサレムが造られて神殿が造られる。



こちらは（一つ前よりも）小さい形になっています。この時には、ペルシャ、ギリシャ、ローマの帝国の下で守られた状態でイスラエルの民、ユダヤ人がいるという状態になります。この時の神殿は第二神殿と言われます。（一つ前が）第一神殿です。

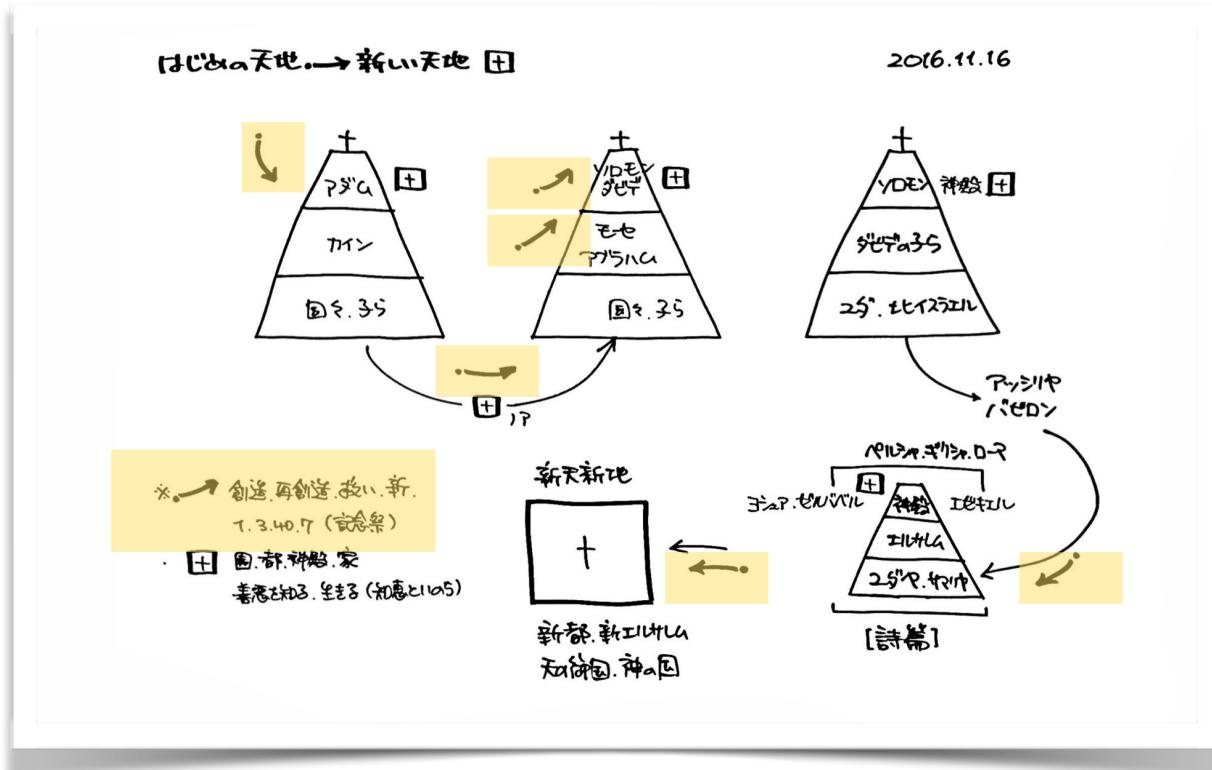
この第二神殿が建っている時に、イエス様が来て、神殿で話していると言われています。この神殿はあまり素晴らしいものではなかったので、前の神殿を見たことがある人は泣いているというようなことが書いてありますが、ただ、最初からどんどんダメになっているということでもないのです。最初の創造よりも次の段階のほうが進んで発展しています。栄光が豊かに現されています。ここから戻って来た時のこの（第二）神殿は見た目、人の目には小さく見えるのですけれど、エゼキエルの神殿のまばろしに言われているように、この時代の（第一）神殿よりももっと偉大な栄光がある、見える人には見えるという時代になっています。

この（第二）神殿は、このモデルは残念ながら、ヨシュア、ゼルバベルがリーダー（王で祭司）なのですが、ここから発展していくべき良いのですが、これ自体がダメになってしまっている。祭司長、律法学者、パリサイ人たちが（リーダーの）座に着いてしまっているということです。



それで、全く新しくイエス・キリストが来て、古い初めの天地ではなくて、新しい天地を造ってくださるというのがこの四角です。この四角の枠は神様の園、都、神殿というものを表しています。それで、この箱（四角の枠）の中に入ることが祝福なのです。

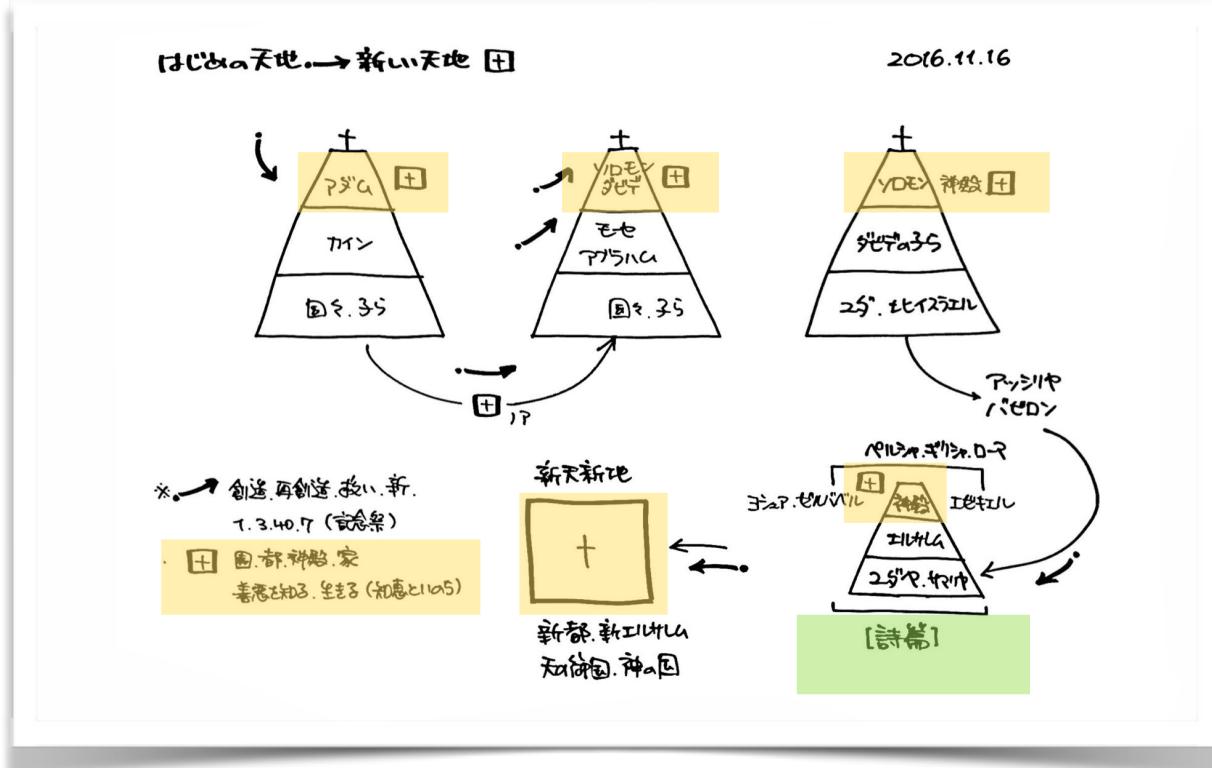
神様に会える場所、神様が見てくれる場所、一緒にいてくれる場所。園、都、神殿、神の家というものの中に、善惡の知恵と命の木があるということは、ずっとモデルとして一貫していますけれど、ここ（新しい天地）にキリストの知恵とキリストの命があるということは、この時代の人たちが聞いてもさっぱりわからなかつた。預言されていることは漠然としてしかわからなかつた。ただ、わかっていた。アブラハムもそれ（新しい天地）を待つていた。預言者たちも皆それ（新しい天地）を待つていた。はつきりと見たいけれど見えなかつたことが、御靈が与えられて見えるようになったこの新しい天と新しい地の時代です。新しい都、新しいエルサレム、天の国、神の国というのがこの時代に来ますということです。



黒丸と矢印（の説明）。約束が与えられて、その約束に従って次の時代に導かれる。約束に従って次の時代に行く、約束に従って次の時代に行くというのが矢印のところです。

(初めが) 創造。次が再創造。(再創造、再創造) 新しくしているということを別の言い方で言うと「救い」です。救いというと靈の個人的なことを考えてしまいがちですけど、それよりも、もっと広くて、もっと世界的な、新しい創造、再創造のことを「救い」と言います。その再創造主のことを「救い主」と言います。

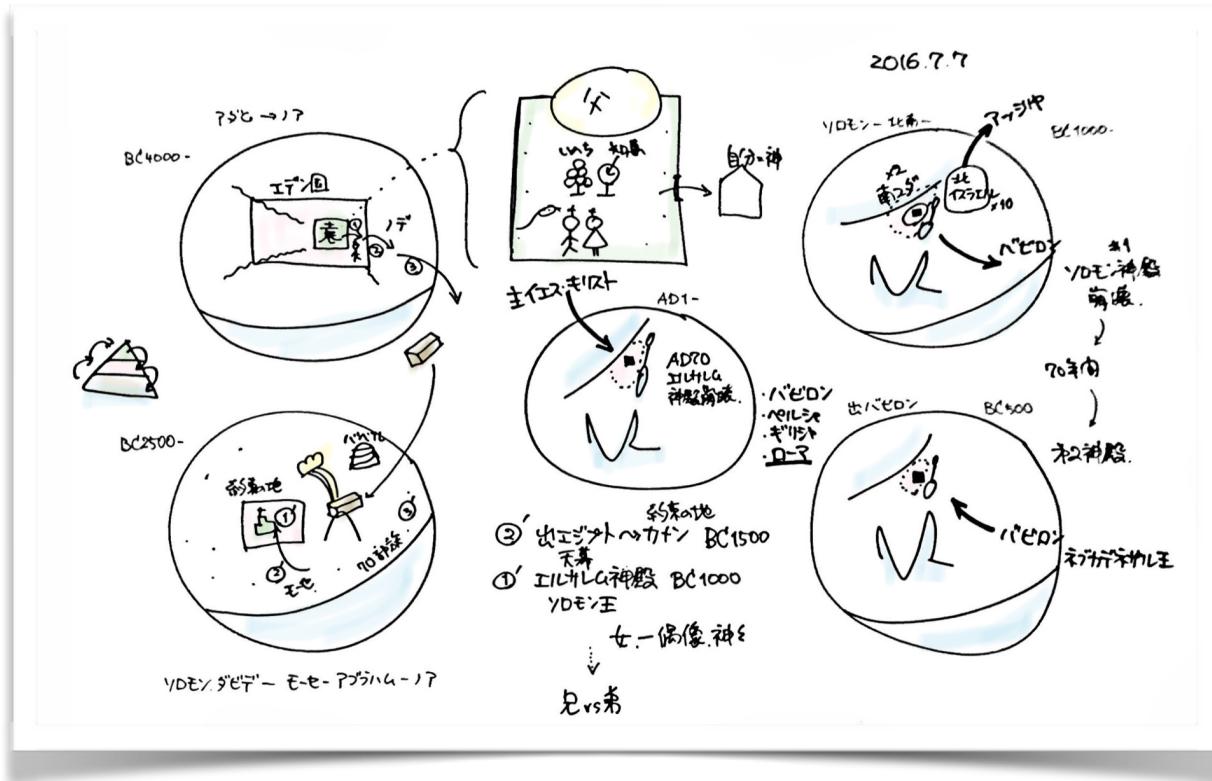
その救い主の来る、再創造には、その戦いにはパターンがあります。ということで、1.3.40.7と書いてありますが、過越の祭り、特にここのモデルです。エジプトから連れ出された過越の祭り、シナイ山で律法をもらうペンテコステの祭り、7週の祭り、40年の荒野のあとに約束の地であるカナンに入っていく仮庵の祭りという1月、3月、7月の祭りが「救い」、再創造のストーリーをいつも記念しなさいと言われているというものになっていますので、記念祭のパターンを通して救いのストーリーを評価するということが正しい分析の仕方だということです。



それと、最初のエデンの園、ダビデの幕屋、ソロモンの神殿を求めている神様に会う場所、神様がいる場所、平和なシャロームな場所、恵みにあふれている場所、これが園、都、神殿、家のモデルですので、これも比べてみる必要があります。

ここに詩篇と書いてありますけれども、ここからここまでがモーセの律法。預言者といっているのは歴史書と預言書が一緒になっていますので、このくくりが預言者。そして詩篇です。詩篇は前から書いてあったものですが、この時代に靈の歌として編集されて、この歌は新天新地を目指している約束の書物という形になっていますから、新しい天、新しい地とはどういうものなのか、どう求めるべきなのかを古い時代よりもつとつはつきりと御靈の力によって教えられている書物です。

詩篇の位置づけは、ちょうどここからイエス様が来るところですので、より靈に近い、靈の歌という感じです。当時の人たちもよく覚えていたわけですから、書かれていた詩篇や預言書やモーセの律法の中にある詩、モーセの歌やダビデの歌などを連想してマリヤは歌うし、ゼカリヤも歌うし、手紙を書いているパウロをはじめ、手紙で新しい天、新しい地を造っていく人たちも詩篇をたくさん引用する。それは、新しい天、新しい地はこの約束のもとに造られていますよ、その目的は神様を歌って賛美することですよ、ということがあふれていることがわかるものだと思います。位置づけとしては最後の(新天新地への)部分を担っているのがこの詩篇になると思います。



(別の地図)